三重県埋蔵文化財調査報告 117

鈴鹿市木田町

磐城山遺跡発掘調査報告

1994. 3

三重県埋蔵文化財センター

序　　文

埋蔵文化財は、私たちの祖先がその時代を懸命に生きた証であり、また、郷土の歴史や文化を今日に伝える貴重なものであります。

しかし、一方で自動車の運搬力や機動力は、現代の生活に欠くことができないものとなり、各地で緊急な道路の建設や改良が、公共事業の大きな課題となっています。

こうしたなかで、三重県埋蔵文化財センターでは、関係機関の御理解と御協力を得て埋蔵文化財の保護に努めてまいりました。

しかし、どうしても現状保存の困難な部分については発掘調査を実施し、記録保存を図っているところであります。

ここに報告いたしますのは、四日市鈴鹿環状線道路改良工事事業に伴い磐城山遺跡の滅失する部分で発掘調査を実施した結果であります。この成果が、消滅した遺跡にかわって、郷土の歴史、文化を未来に伝えることを切望するものであります。

最後に、事前協議から発掘調査にかけて多大な御理解と御協力をいただいた県土木部道路建設課、鈴鹿土木事務所及び地元自治会の方々に、心から感謝いたします。

平成6年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長　久　保　富　子

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が、三重県土木部から執行委任を受けて実施した四日市鈴鹿環状線国補道路改良工事事業に伴う磐城山遺跡（磐城山古墳群）の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査は次の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第１課

主事　森川常厚　　研修員　吉田利弘

調査協力　三重県土木部道路建設課

鈴鹿土木事務所

鈴鹿市教育委員会

地元（木田・国分・山辺）各位

3．調査面積　1,100㎡

4．調査期間　平成５年５月11日～同年８月６日

5．本書の作成は、遺構、遺物の実測及びトレースは調査担当者の他に管理指導課業務補助員楠純子、松本春美、川方裕美、北山美奈子、浜崎佳代が行い、写真、執筆、編集は森川常厚が行った。

6．図面における方位は、全て磁北を用いた。なお、当地域の磁針方位は、西偏６°20′（昭和55年）である。

7．本書に使用した事業計画図面は、土木部の提供による。

8．本書で用いた遺構表示略記号は、下記による。

ＳＤ：溝　　ＳＨ：竪穴住居　　ＳＫ：土坑　　ＳＺ：不明遺構・その他

9.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ．前言 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 1
Ⅲ．遺構 …… 7
　1．弥生時代の遺構 …… 7
　2．古墳時代の遺構 …… 8
　3．中世の遺構 …… 8
　4．Ｄトレンチ …… 12
　5．Ｅトレンチ …… 12
　6．Ｆトレンチ …… 13
Ⅳ．遺物 …… 13
　1．弥生時代の遺物 …… 13
　2．古墳時代の遺物 …… 13
　3．中世の遺物 …… 13
　4．包含層、その他出土の遺物 …… 15
Ⅴ．結語 …… 15
　1．塚状遺構 …… 15
　2．城館状遺構 …… 16

図版目次

図版１ …… ＳＺ30（磐城山１号墳）調査前風景
　　…… ＳＺ31（磐城山２号墳）調査前風景
図版２ …… ＳＺ30（磐城山１号墳）とＡ地区全景
　　…… ＳＺ30（磐城山１号墳）とＡ地区全景
図版３ …… ＳＫ８
　　…… ＳＫ15
図版４ …… ＳＺ30（磐城山１号墳）断面
　　…… ＳＤ１
図版５ …… ＳＺ31（磐城山２号墳）とＢ地区全景
　　…… ＳＺ31（磐城山２号墳）断面
図版６ …… 出土遺物

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡地形図 …… 2
第３図　調査区位置図 …… 3
第４図　Ａ地区平面図 …… 4
第５図　Ａ地区ＳＺ30除去後平面図 …… 5
第６図　Ｂ地区平面図 …… 6
第７図　Ｂ地区ＳＺ31除去後平面図 …… 6
第８図　ＳＨ20，ＳＨ21実測図 …… 7
第９図　ＳＫ８実測図 …… 8
第10図　ＳＫ15実測図 …… 8
第11図　ＳＺ30調査前測量図 …… 9
第12図　Ａ地区・ＳＺ30土層図 …… 10
第13図　ＳＺ31調査前測量図 …… 11
第14図　Ｂ地区・ＳＺ31土層図 …… 11
第15図　Ｄトレンチ東面土層図 …… 12
第16図　Ｅトレンチ東面土層図 …… 12
第17図　遺物実測図 …… 14

Ⅰ．前　　言

三重県教育委員会では、国及び県にかかる各種公共事業に関して、各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めている。

こうした中で、三重県土木部道路建設課から、四日市鈴鹿環状線国補道路改良工事事業計画の照会を受け、三重県埋蔵文化財センターが、事業予定地内の遺跡分布調査を実施した。その結果、事業地は磐城山遺跡内にあたり、さらに磐城山１・２号墳の半分が、その中に含まれることが判明した。センターでは、詳細な遺跡の実態を把握するために、平成４年10月に試掘調査を実施した。その結果、磐城山遺跡については遺構は検出されず、すでに削平か流失したものと判断した。磐城山１・２号墳については、人為的な盛り土であることが確認され、220㎡が遺跡範囲となった。

この取扱いについては、その保護に努めるよう県土木部・鈴鹿土木事務所と、県教育委員会文化振興課・県埋蔵文化財センター間で協議が重ねられたが、現状保存が困難なため、やむなく発掘調査を実施し記録保存することになった。

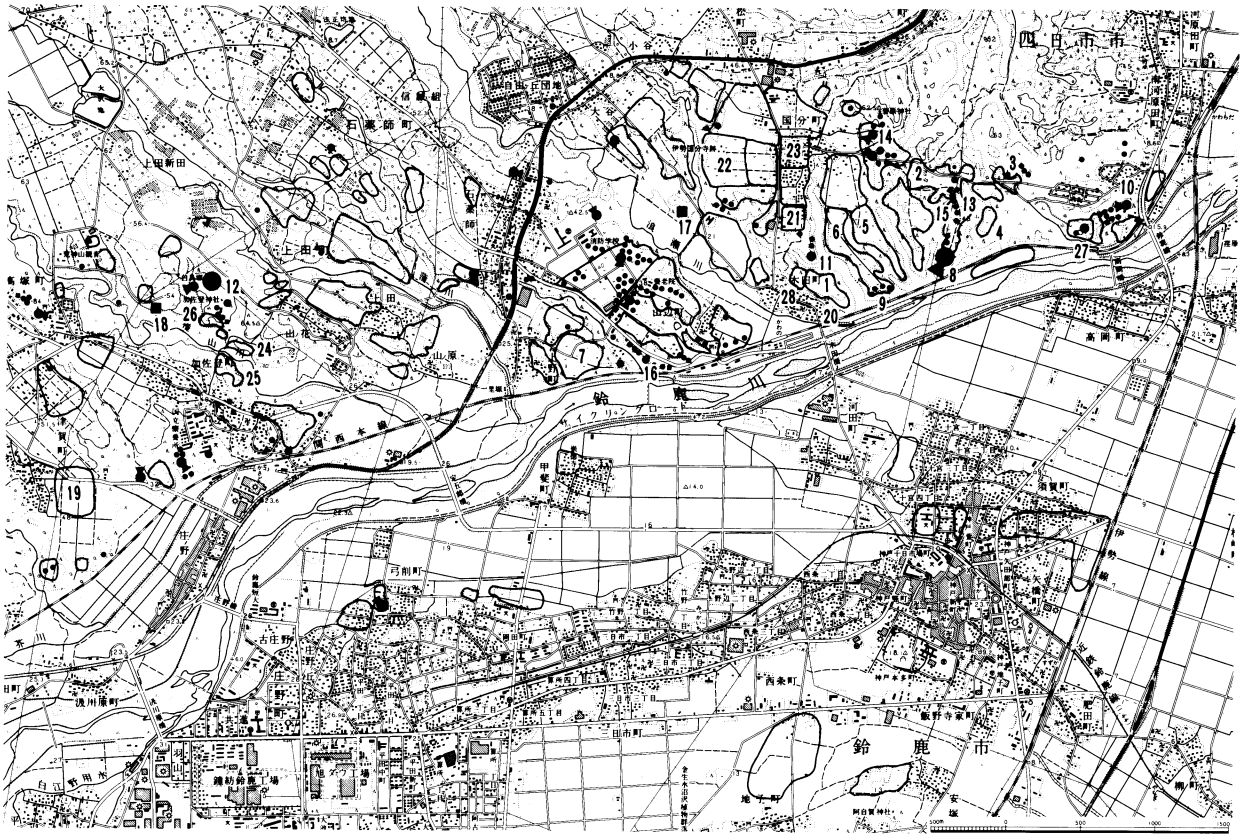
発掘調査は、古墳を想定して行ったが、１号墳周辺で遺構が確認され、また、堀状の遺構が、検出されたことから、中世城館の可能性を考えざるを得なくなった。そこで、急遽Ａ～Ｆトレンチを台地上から先端部にかけて設定し、その実態の把握に努めた。その結果、遺構が検出されたＡ～Ｃトレンチ部分を拡張して発掘調査を行うことになり、調査面積は1,100㎡に拡大することになった。

Ⅱ．位置と環境

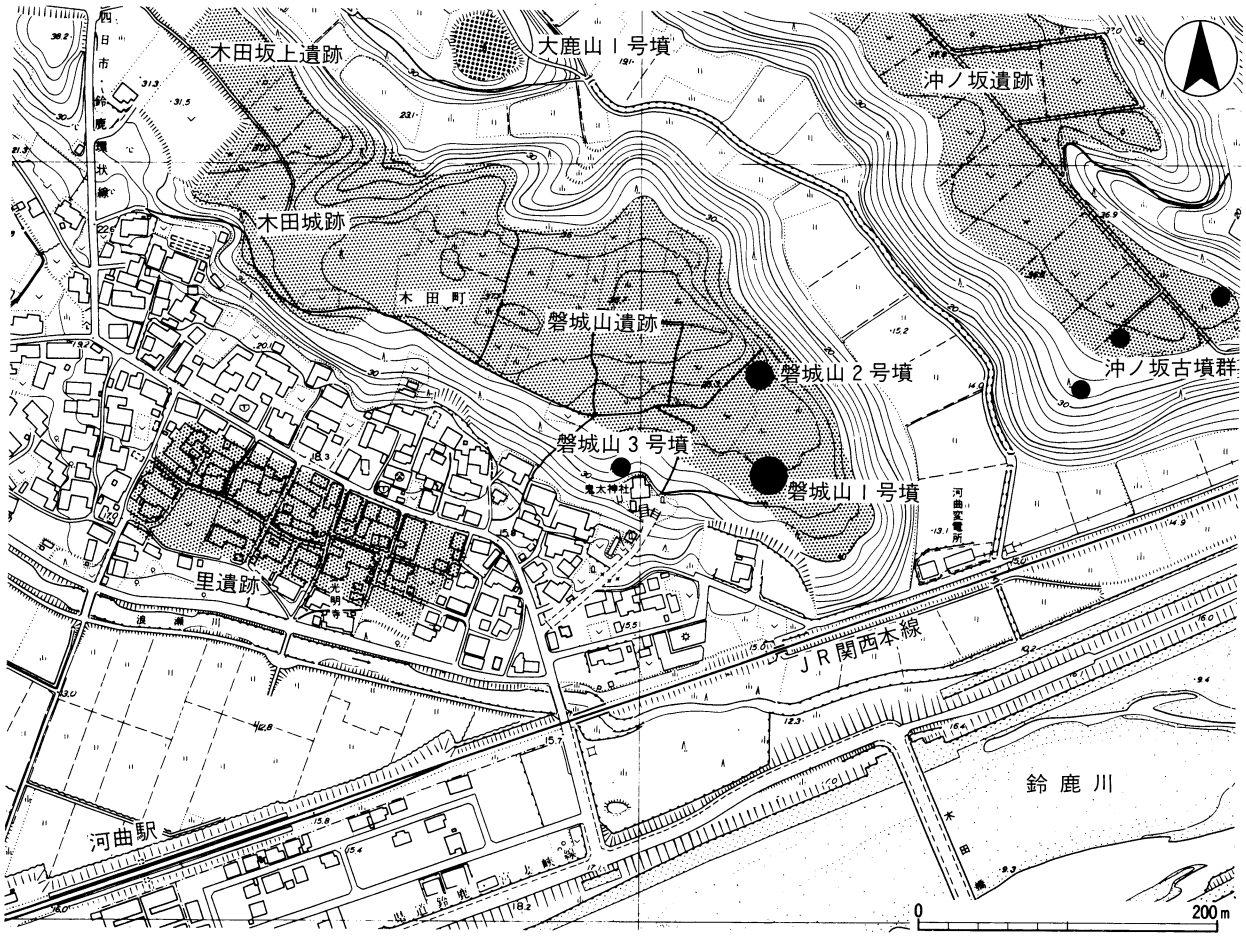
鈴鹿市北部に広がる台地は、鈴鹿川により侵食され、左岸に比高10m～20mの断崖を形成している。また、この台地には、幾筋もの谷が鈴鹿川に向かって深く開析しており、磐城山遺跡（１）はこの台地上に広がる遺跡である。西側は遺跡南方で鈴鹿川に注ぐ浪瀬川の侵食を受け、東側にも深い開析谷が走ることから、結果的に南へ延びる舌状台地の先端に位置することになる。標高は約36mあり、開析谷との比高差は約20mである。

この台地上は、遺跡の密集地としても知られ、弥生時代を中心とする遺跡が連続的に存在している。磐城山遺跡も、弥生時代～室町時代の遺跡として周知されてきた。近年、開発事業に伴う発掘調査も数多く行われており、寺山遺跡（２）、扇広遺跡（３）、西ノ岡Ｂ遺跡（４）、中尾山遺跡（５）、沖ノ坂遺跡（６）からは、弥生時代中～後期の竪穴住居や方形周溝墓、大溝が検出された[①]。さらに、一反通遺跡（７）からは、銅鐸片や、銅鐸形土製品が出土している[②]。

古墳時代には強大な権力が成長したようで、全長90mの能褒野大塚古墳（亀山市）や、70mの寺田山1号墳（８）等、前期を代表する前方後円墳がこの台地上に築かれた。後期のものも多く、台地縁辺部を中心に沖ノ坂古墳群（９）、高岡山古墳群（10）、大鹿山古墳群（11）、白鳥塚古墳群（12）等が知られているが、寺田山古墳群（13）のように既に削平され周溝のみとなっている[③]ものも多い。磐城山遺跡内にも、磐城山1～3号墳が周知されていた。調査例も増加しており、全長20mの前方後円墳であることが確認された富士山10号墳（14）[④]、粘土槨をもち、鉄刀が出土した広瀬町の矢下3号墳[⑤]、鉄刀、鉄斧、形象埴輪が出土した木棺直葬の寺田山7号墳（15）[⑥]、横穴式石室から土師器高杯がまとまって出土した南山6号墳（16）[⑦]、方墳に横穴式石室を採用した蛸田古墳（17）[⑧]、横穴式石室から無文銀銭が出土した北野古墳（18）[⑨]等、多くの事例がある。また、集落跡も、寺山遺跡、沖ノ坂遺跡で竪穴住居が検出されており[⑩]、津賀平遺跡（19）では、ベット状遺構をもつ



第１図　遺跡位置図（１：50,000）（国土地理院・鈴鹿・１：25,000）



第２図　遺跡地形図（１：5,000）

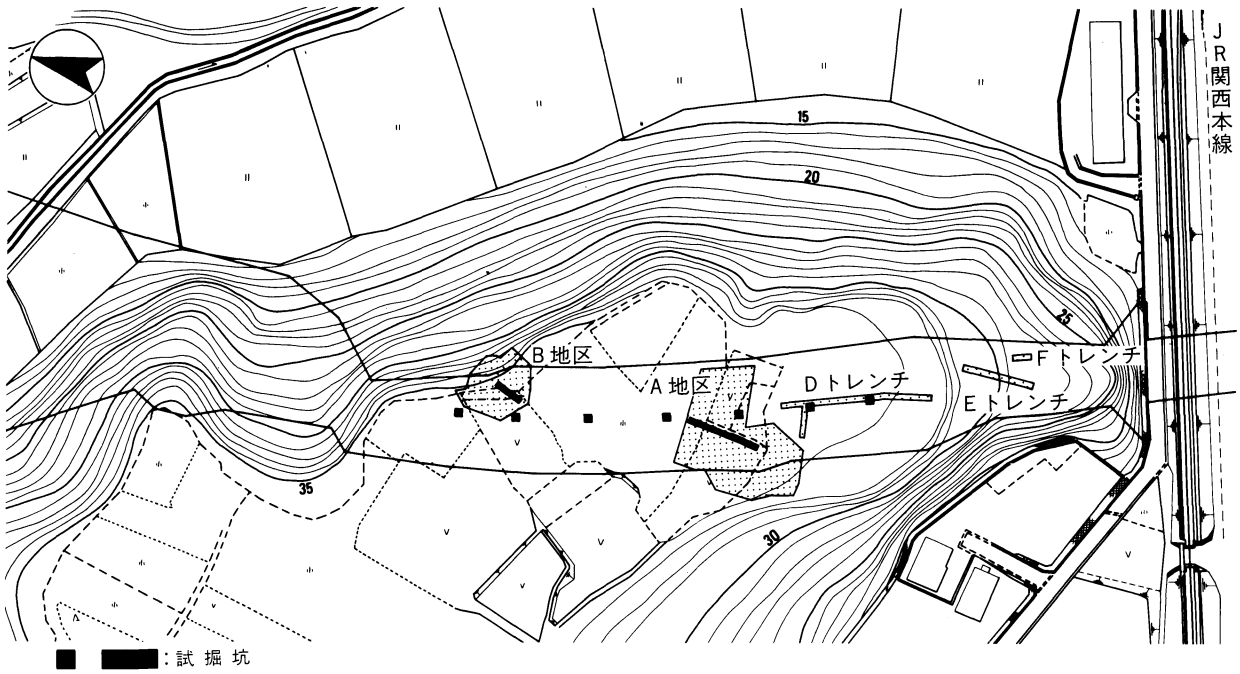
ものが検出されている[11]等、当期の実態が徐々に明らかになりつつある。

律令制下では河曲郡に属する。郡内に推定される延喜式内社は20座と高密度で、磐城山遺跡南側の崖下にも式内鬼太神社（20）が鎮座する。日本書紀天武天皇元年には、「到川曲坂下而日暮也。以皇后疲之、暫留輿而息[12]。」とあり、壬申の乱では、大海人皇子がこの付近を通過したようである。このためか、大鹿廃寺（21）には川原寺式軒瓦が使用されている[13]。また、伊勢国分寺（22）・国分尼寺（23）もこの台地に築かれ、奈良時代中期以後は3寺院が並立していたようである[14]。また、古東海道がこの地を通過し、河曲駅もこの付近に推定されている。さらに、国分尼寺に瓦を供給した川原井瓦窯（24）[15]や伊勢国府の可能性が大きい広瀬町の長者屋敷遺跡[16]もこの台地上にあり、伊勢国の政治、交通の中心であったことが明確である。

平安時代にはいると調査例は激減し、寺山遺跡、川原井遺跡（25）で掘立柱建物が検出されている[17]にとどまる。中世では、多くの遺跡から中世遺物が表採されているものの、調査例は椎山中世墓（26）[18]があるのみで、不明な点が多い。

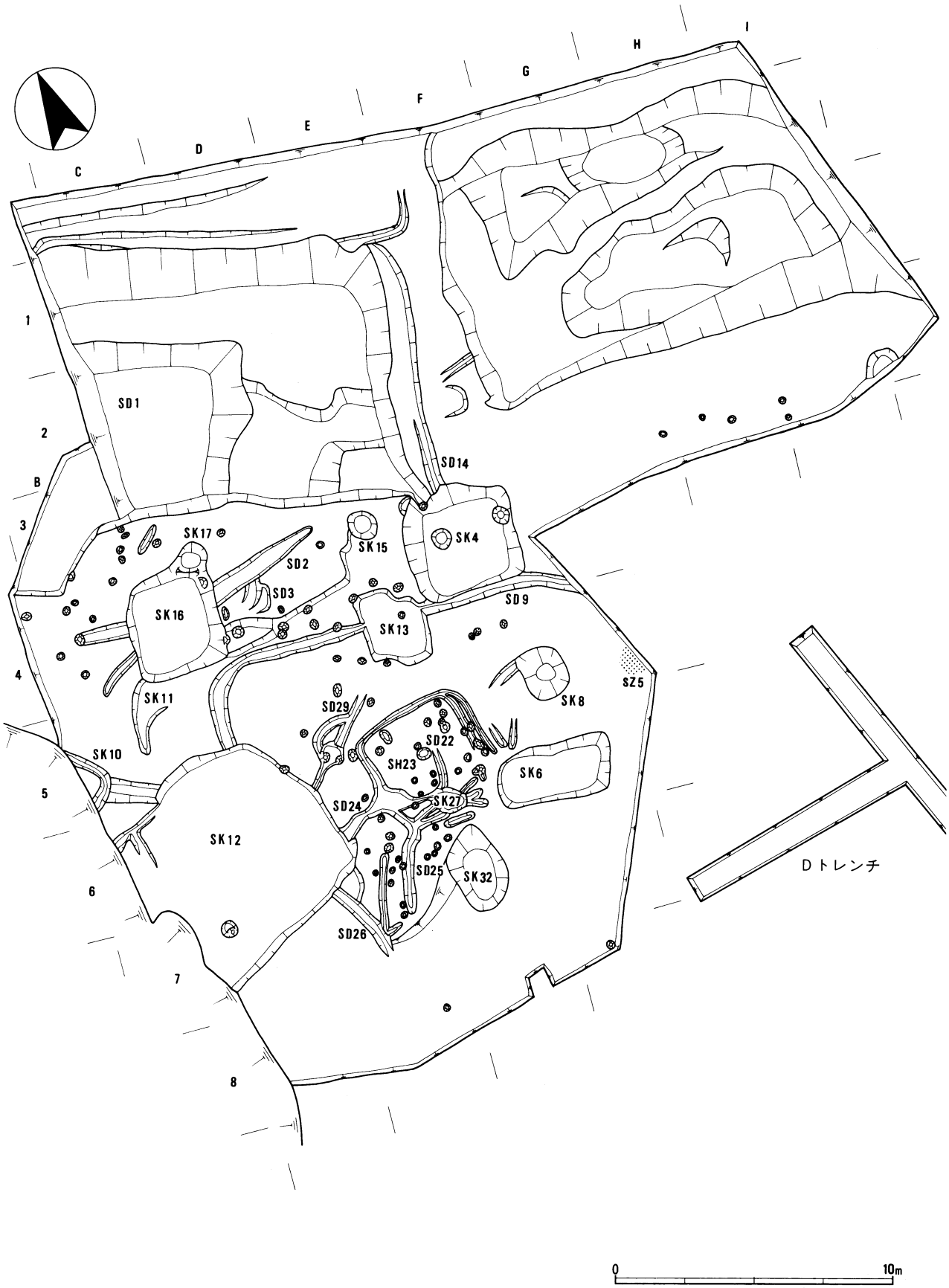
戦国時代には、山路弾正種常が高岡城（27）に籠もって織田信長と抗争したことが勢州軍記に記載され、木田城（28）も山路一族が城主と伝えられる[19]。しかし、これら中世城館の発掘調査例はなく、現況観察にとどまっており、詳細は不明である。木田城は、磐城山遺跡に西接して所在し、「E」字を横にして南方に開けた形の土塁が残存する[20]。舌状台地が最もくびれた場所に立地するため、全面と背後は深い谷となり、自然地形を巧みに利用して築かれた様子がうかがえる。

このように鈴鹿市北部の台地は、弥生時代中期後半から平安時代前期にかけての遺跡密度が高く、近年の発掘調査により徐々にその実態が明らかになりつつある。しかし、縄文時代以前と中世以後については、発掘調査例も少なく、考古学的にほとんど不明な地域である。

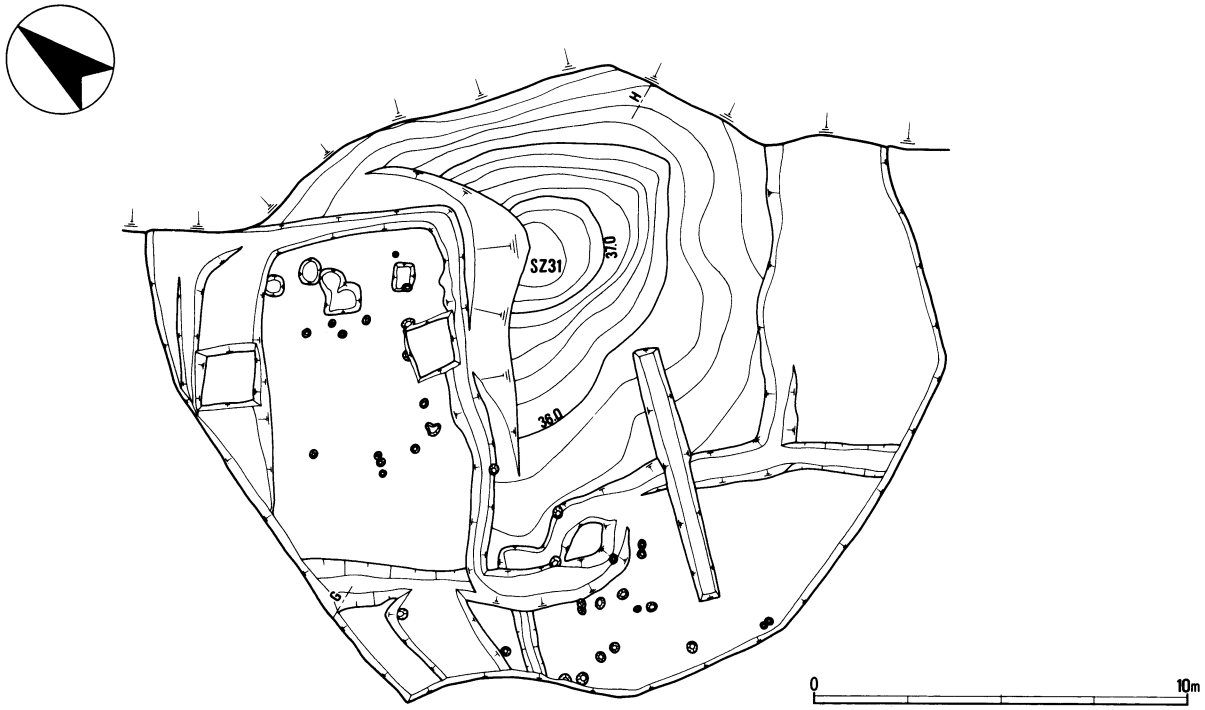


第3図　調査区位置図（1：2,000）

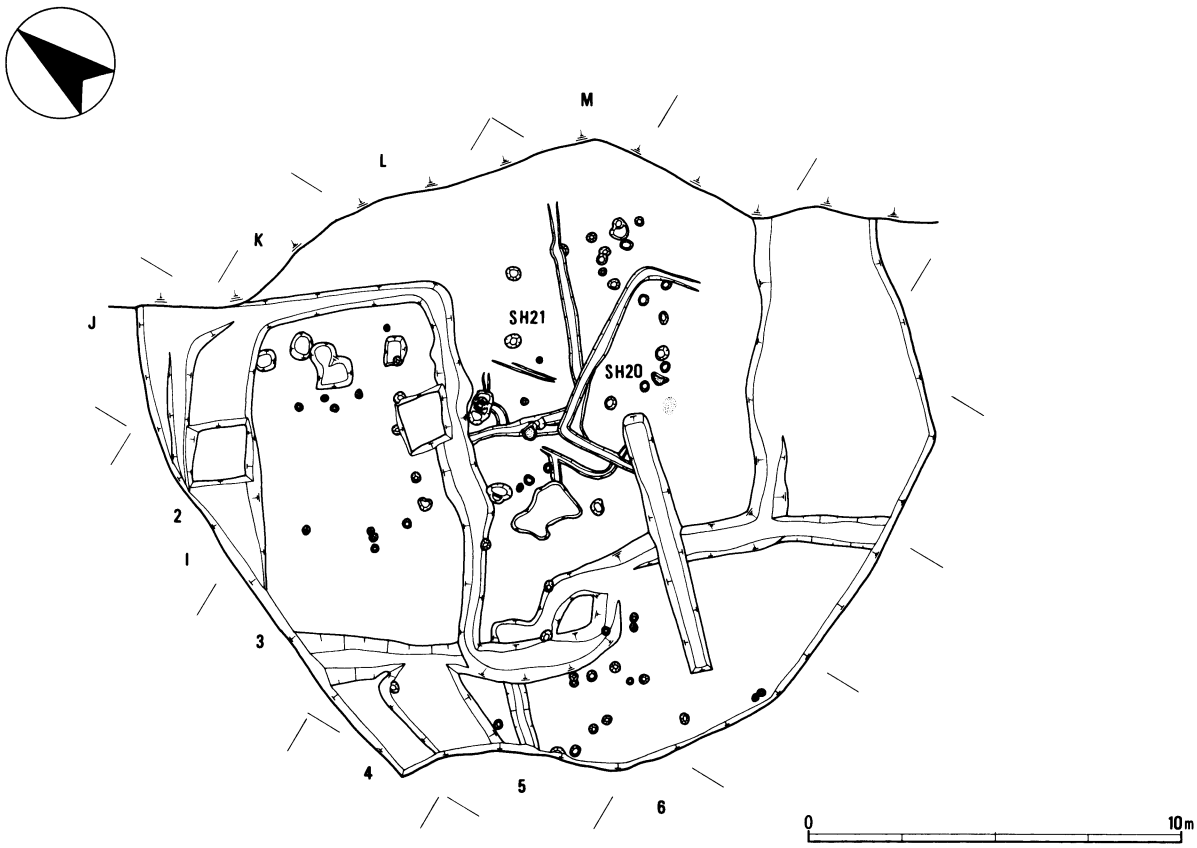
第4図　A地区平面図（1：200）



第５図　Ａ地区ＳＺ30除去後平面図（１：200）



第６図　Ｂ地区平面図（１：200）



第７図　Ｂ地区ＳＺ31除去後平面図（１：200）

Ⅲ. 遺　　構

ＳＺ30・31の下から、比較的高密度に検出された。弥生時代後期、古墳時代後期、中世の３時期がある。しかし、遺構の残存状況は悪く、特に弥生時代後期、古墳時代後期のものは劣悪である。これらの遺構は、ＳＺ30・31の盛り土のため、かろうじて流失や削平から免れたものと考えられる。

１．弥生時代後期の遺構

Ａ．竪穴住居

ＳＨ23・ＳＤ25・ＳＫ27　ＳＺ30除去後、周溝のみを検出した。一辺3.5ｍの方形を呈する。周溝には重複があり、内側にやや縮小して建て替えられているようである。南側の周溝に重複してＳＫ27があり、貯蔵穴かもしれないが、深さが10cmであり、疑問もある。南西角から排水溝ＳＤ25が延びる。住居内には多数の柱穴状遺構が検出された。主柱穴を特定することはできないが、極端に壁に近いものかもしれない。残存が劣悪のため、時期決定に不安が残るが、古式土師器の時期の可能性もある。

Ｂ．土坑

ＳＫ10　Ａ地区西端での検出のために全体の形態は不明であるが、深さ30cmで壁に沿って浅い溝が巡る。これを周溝とする竪穴住居の一部であるかも知れない。溝内からＳ字口縁甕片が出土している。古墳時代初頭とすべきかもしれない。

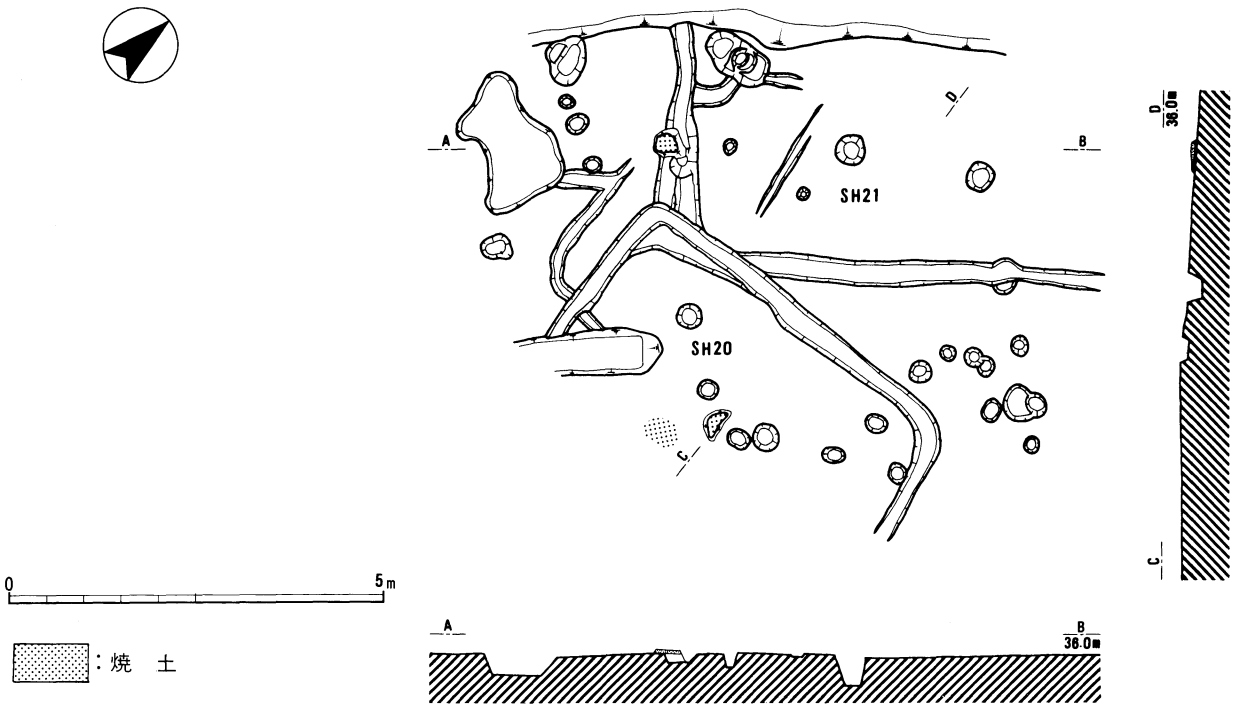
ＳＫ11　ＳＫ16に切られ、さらに深さ10cm未満の残存であるために全体の形態は不明であるが、幅１ｍほどで南に直角に屈曲して消滅する。竪穴住居の一部であるかも知れない。

Ｃ．溝

ＳＤ14　幅50cm、深さ20cm前後の南北に延びる溝である。南端はＳＫ４に切られ、北端はＳＤ１により削平される。

ＳＤ22　ＳＺ30墳丘除去後に検出した、幅40cm未満の小溝である。ＳＫ27と重複するが、その切り合いは不明である。

ＳＤ24　ＳＺ30墳丘除去後に検出した深さ5cm前後の小溝である。西端はＳＫ12に切られ、東側はＳ



第８図　ＳＨ20、ＳＨ21実測図（１：100）

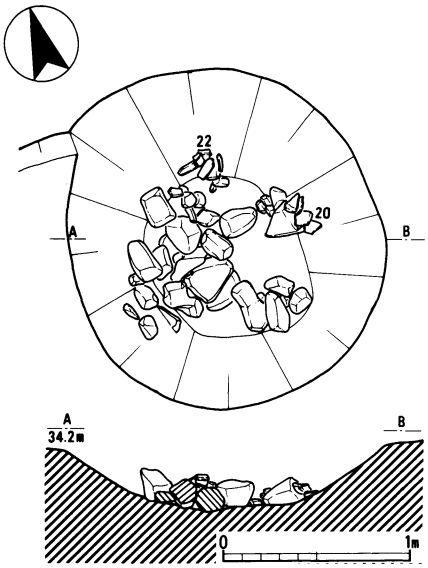
H23を横切り消滅する。ＳH23との切り合いは不明である。

ＳＤ29　ＳＺ30墳丘除去後に検出した。幅20cm前後、深さ10cm未満の痕跡程度に残る溝である。北端は消滅し、南端はＳＫ12に切られる。他に、弯曲する溝が重複するが、前後関係は不明である。

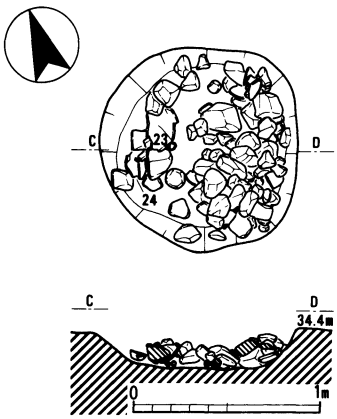
2．古墳時代後期の遺構

A．竪穴住居

ＳＨ20　ＳＺ31墳丘除去後に検出した。南半分は削平のため消滅し、北側の周溝のみの検出であるが、一辺約５ｍの方形を呈するものと推定される。中央に焼土があり、炉の跡と考えられる。ＳH21より先行する。



第９図　ＳＫ８実測図（１：40）



第10図　ＳＫ15実測図（１：40）

ＳＨ21　ＳH20と同様墳丘除去後の検出である。周溝のみの残存で、南西角以外は削平のため消滅している。このため、方形を呈するものと考えられるが、その規模は不明である。残存長は、６ｍである。西側の周溝上に焼土があり、竈跡の可能性がある。

B．土坑

ＳＫ12　東端はＳＺ30墳丘除去後の検出である。西端は土取りにより消滅するが、一辺７ｍの方形を呈する。底は平坦で、竪穴住居の可能性がある。中世遺物の混入があるが、特に山茶椀（９）は完形であり、他に中世の遺構が重複していた可能性がある。（９）の出土が底からかなり浮いた状態であったため、この時代の遺構とした。

3．中世の遺構

A．土坑

ＳＫ４　Ａ地区中央で検出した、一辺約４ｍの正方形を呈する土坑である。深さ30cmで、底は平坦である。遺物は、小片が出土するにとどまり、図示できるものはない。西に７ｍ離れたＳＫ16とすべての要素が共通する。

ＳＫ６　大部分がＳＺ30墳丘下からの検出である。長辺４ｍ、短辺２ｍの長方形を呈する。深さ30cmで、底は平坦である。遺物は、全て小片であるが、近世陶器片の混入があるため、さらに時期が下る可能性もある。

ＳＫ８　Ａ地区西側で検出した。直径1.7ｍの円形を呈し、西側半分はＳＺ30の下からの検出である。深さ30cmで、壁は緩やかに傾斜し、径20cmほどの石が多数出土した。その状況は雑然としており、配置された様子は認められない。また、比較的多くの遺物が出土し、土師器皿（13～18）、羽釜（19～22）があるが、これらについても埋納された様子は認められない。埋土は、検出面から約10cmまでは、暗茶色、それ以下は灰茶色に変化する。

ＳＫ13　一辺２ｍの不整方形を呈し、深さは20cm前後で底は平坦である。ＳＤ９を切る。

ＳＫ15　Ａ地区中央で検出した。直径15cmの円形を呈し、深さ20cmで底は平坦である。内部には、径約10cmほどの石がぎっしり詰まっていた。その状況から、これらは故意に入れられたものと考えられる。

第11図　ＳＺ30調査前測量図（１：200）

羽釜（23・24）が土坑西隅から出土した。埋納されたものかどうかは不明だが、破片としては大きいもので、（23）は接合の結果1/2ほどにまで復元できた。

ＳＫ16　長辺3.8m、短辺３mの正方形に近い長方形を呈する。深さ40cmで、底部は平である。規模、形態ともにＳＫ４と共通する。遺物は小片しか出土していないが、陶器片もあることから近世まで下る遺構の可能性もある。

ＳＫ17　Ａ地区中央でＳＫ16と接して検出された。ＳＫ15と同様な規模、形態であるが、内部の石は認められない。さらに、遺物も小片のみの出土であった。弥生～古墳時代の遺物しか出土していないが、ＳＫ15と同様のため、この時代とした。

ＳＫ32　ＳＺ30墳丘下から検出した。長辺３m、短辺２mの楕円形を呈し、深さは、残存の良好な北側で30cmを測る。遺物が全く出土していないので、時期は不明であるが、土坑の多くが中世のため、一応この時代としておく。

Ｂ．溝

ＳＤ１（ＳＤ７）[21]　台地を切断するかたちで掘られた堀状の溝で、中央に幅３mの土橋状の掘り残しがある。幅９m、深さは１m～1.5mと一様でない。しかし、その幅に比べて、深さは浅く、城館の堀切としては不十分なものである。壁は、垂直に近く立ち上がる場所もあれば、非常になだらかなものもあり一定でない。土橋の東側の底は凸凹が激しく、特に、土橋から底に向かってなだらかに下がる坂道状の掘り残しが認められる。それは、あたかも人が上り下りする通路のようである。埋土は、茶色土が主体で、水が溜まった様子は認められない。

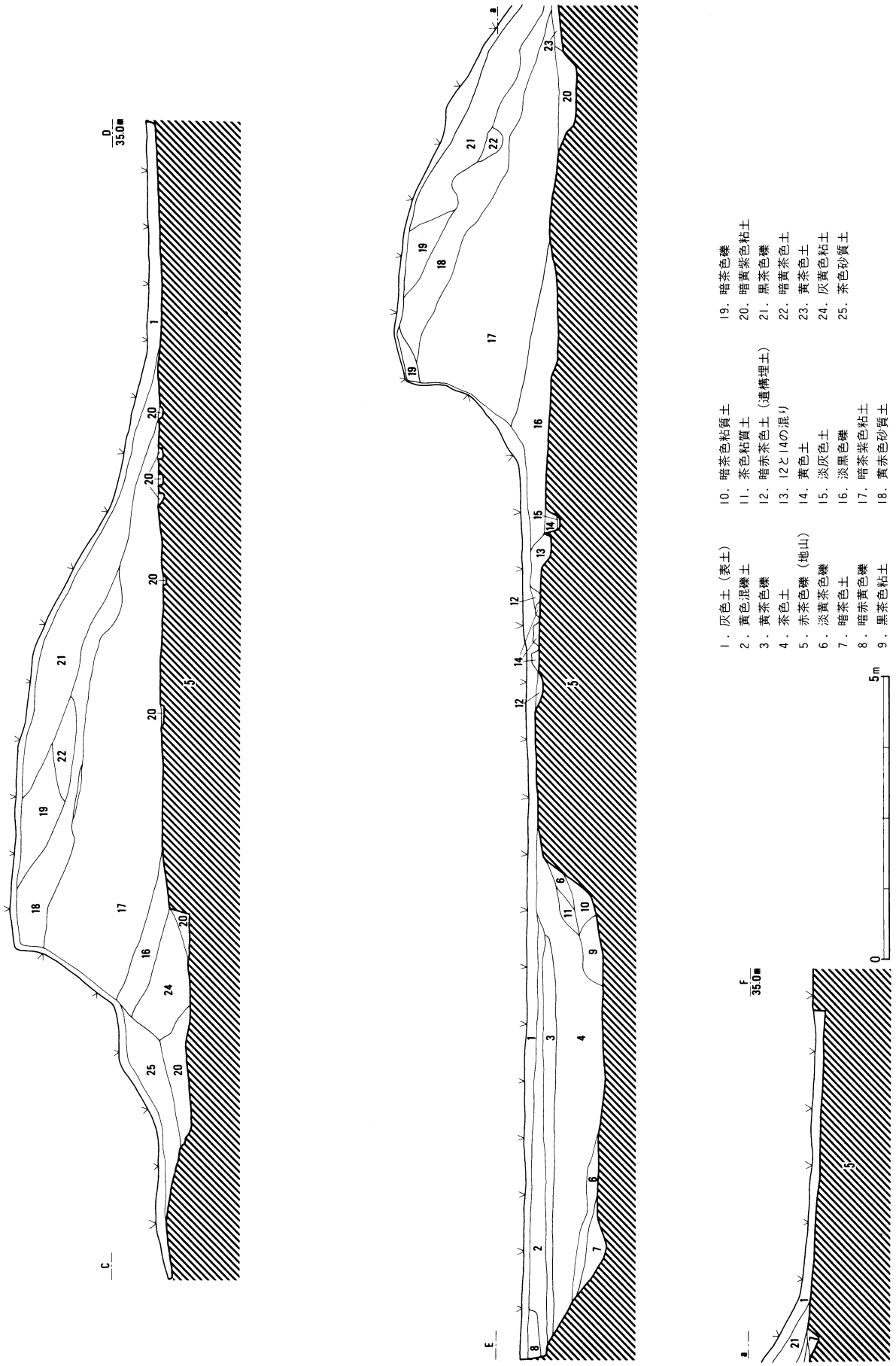
ＳＤ２　幅80cm、深さ10cm前後の浅い溝である。ＳＫ16と重複するが、切り合いは不明である。

ＳＤ３　幅60cm、深さ10cm未満の浅いもので、一部が残存するにすぎないものと考えられる。西に屈曲する様子が認められる。

ＳＤ９・ＳＤ26　幅60cm、深さ10cm～20cmの比較的しっかりした溝である。調査区中央を東西に横切り、西端は南へ屈曲し、ＳＤ26につながるものである。ＳＫ13に切られ、不明確ながらＳＫ12を切るものと考えられ、ＳＫ４との前後関係は不明である。区画溝のようであるが、これに伴う遺構は認められない。瓦質火舎片が出土している。

Ｃ．塚状遺構

ＳＺ30　Ａ地区で、台地西端に立地する。磐城山１号墳として登録されていたものである。北側と西



第12図　Ａ地区・ＳＺ30土層図（１：100）

側は土取りされ、全体の形態は不明だが、直径20mほどの円墳状を呈するものと推定される。その場合、全体の1/4の残存しかないことになる。断面土層は、素直な山形を呈している。まず、淡黒色礫を60cmほど積み上げ、その上に盛土の主体となる暗茶紫色粘土を盛り上げる。最上部60cmほどは、混礫土や砂質土となり、全高は2.8mに達する。埋葬施設や、遺物の埋納等は検出できなかった。盛土内からは、羽釜片、山茶椀片が若干出土したのみである。

ＳＺ31　Ｂ地区で、台地北端に立地する。磐城山２号墳として周知されていたものである。径約16mの円墳状を呈するものと推定できるが、方墳状であった可能性も残る。台地東端に立地するため、東側は垂直近く落ちる崖となる。この崖は、土取りか、崩落があるようで、全て自然の斜面ではない様である。北側は大きく土取りされており、全体の1/2未満の残存である。断面観察によると、地山から60cmまでは旧地形が残っており、古墳時代と中世の包含層が残存していた。その結果、中世の地表は現地表より50cmほど高かったことがわかる。その層の上に、淡赤色土が60cmほど盛られる。これは、地山の土である。それ以上は、大きく土が異なり、混礫土となる。また、墳丘を東に拡張するように盛られている。結局、盛土高は、1.3mしかないことになる。ＳＺ30と同様、埋葬施設や、遺物の埋納は認められず、盛土から山茶椀片が出土したのみである。

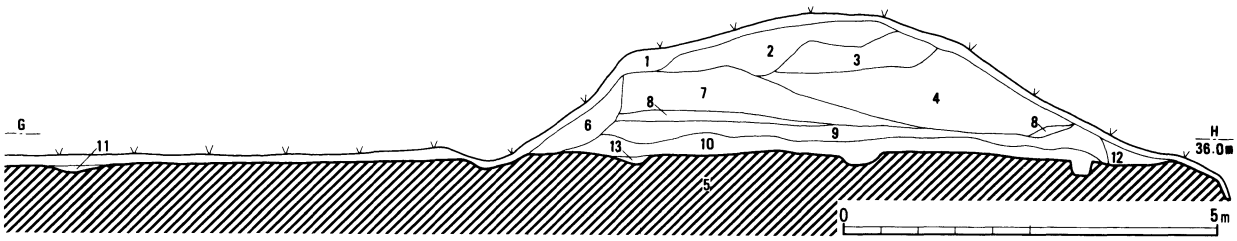
Ｄ．不明遺構

ＳＺ５　Ａ地区東端で、土器の集中する地点をＳＺ５として取り上げた。器種は土師器皿がほとんどで、風化のため取り上げ時に細片になってしまったものも多い。このため、図示できたものは3点（10～12）のみであるが、10個体前後はあったものと考えられる。土坑を伴うことはなく、重ねて置かれた様子もないため、投棄されたもののようである。

４．Ｄトレンチ

Ａ地区から台地先端に向かってＬ字状に設定したトレンチである。Ａ地区で検出した遺構の広がりの確認、ＳＤ１が城館の堀とした場合の遺構の有無の確認の2つの目的をもつ。幅１ｍ、総延長は、58mである。その結果、遺構は検出されず、遺物もほと

第13図　ＳＺ31調査前測量図（１：200）



1．黒色腐植土（表土）
2．淡灰色混礫土
3．淡茶色混礫土
4．淡黄灰色混礫土
5．明赤色土
6．淡茶色砂質土
7．淡赤色土
8．暗茶色土（包含層：中世）
9．茶色土（包含層）
10．黒茶色土（包含層＋ＳＨ21埋土）
11．暗灰茶色砂質土
12．淡灰色混礫土
13．灰茶色土

第14図　Ｂ地区・ＳＺ31土層図（１：100）

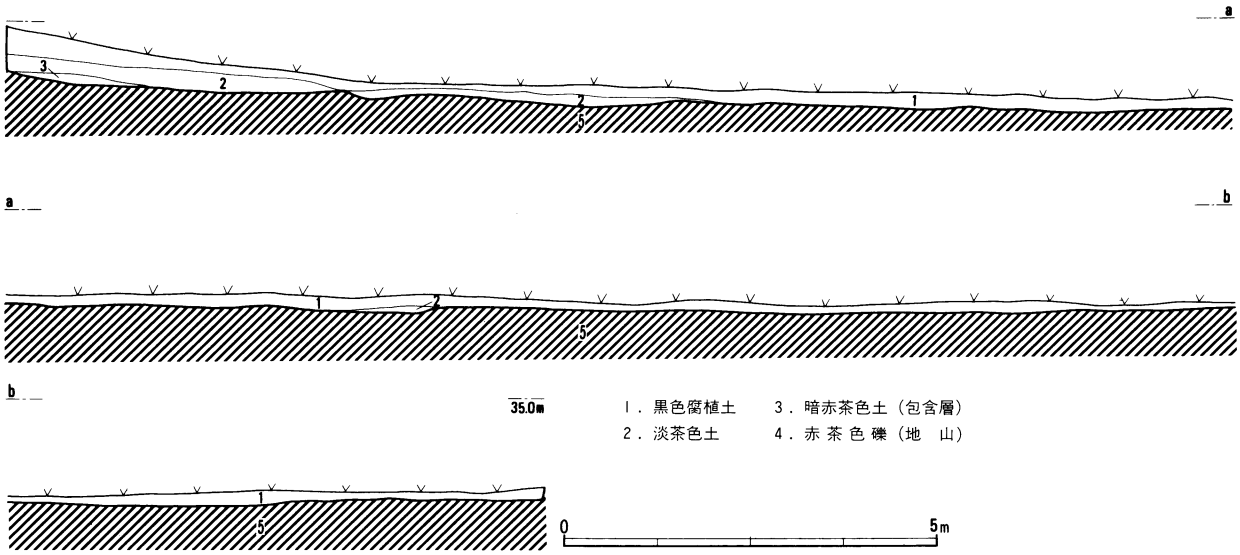
んど出土しなかった。土層は、その大半で、表土下20cmで赤茶色礫の岩盤となる。しかし、トレンチ北端部には、包含層が若干残っていた。

5．Eトレンチ

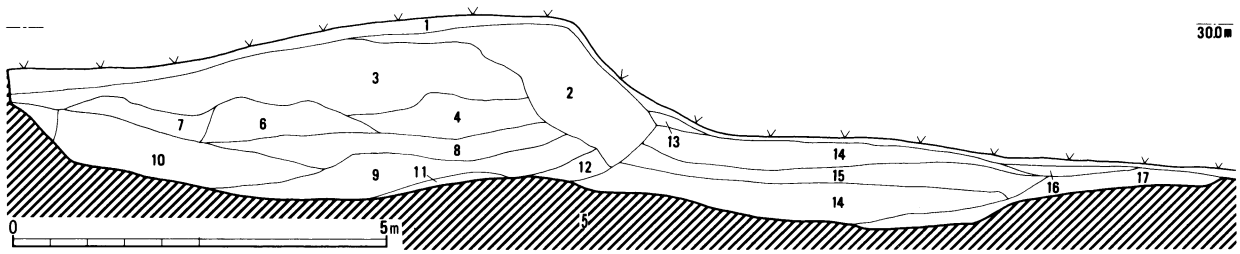
台地先端部の階段状地形が、城館の郭に相当するものかを確認するために設定したトレンチである。幅2m、延長は19mである。

現況は、台地先端より6mほど垂直に落ち、8mほどの平坦面の後再び2m下がる。その後は、15mの平坦面の後、傾斜面となり、先端は、JR線のため土取りされている。平坦面は、いずれも台地東側に回り込んで途絶える。上位の平坦面の先端は、土塁状に若干盛り上がる。

調査は、上位平坦面から下位平坦面までを断ち割るかたちで実施した。その結果、岩盤は、上位平坦面の下で若干の窪みを呈し、下位平坦面では、表土直下となる。したがって、この平坦面は岩盤に影響されたもので、人為的な整形によるものとは考えにくい。この窪みには、黒色土が堆積し、その層を切るかたちで、弥生土器の包含層がのる。この包含層は、遺跡に対応するものではなく、かつて台地上に存在した遺跡が、この窪みに流れ込んで堆積したものと考えられる。また、包含される弥生土器は、後期のものである。この上に、山茶椀を包含する層がのる。非常に柔らかく、堆積してからの時間差は少ないものと考えられるが、山茶椀より新しい遺物は検出できなかった。また、最上部の黄色混礫層は、黒色土や、弥生土器を包含する層を切り込むかたちで堆積している。この平坦面が、上位、下位に分かれるのは、山茶椀を含む層の堆積によるものであるが、郭を構築するのであれば、切り込む必要はない。



第15図　Dトレンチ東面土層図（1：100）



1．黒色腐植土（表土）
2．黄色混礫土
3．淡茶色土
4．暗茶色土
5．赤茶色礫（地山）
6．暗茶色礫
7．暗茶色土
8．黒灰色礫（包含層：弥生）
9．淡赤茶色礫（包含層：弥生）
10．暗青灰色土
11．黒青色粘土
12．明灰黄色礫
13．灰茶色土
14．黒色土
15．黒茶色土
16．黄灰色礫
17．暗茶色土

第16図　Eトレンチ東面土層図（1：100）

さらに、仮にこれを郭とした場合の旧地表面に相当する層は認められず、城館によく認められる水切りのための小溝の検出もなかった。以上により、この平坦面を城館の郭と認めることはできなかった。新しい遺物の出土はなかったものの、非常に柔らかい層であることから、比較的新しい時期に土の移動があったものと考えられる。

6．Ｆトレンチ

Ｅトレンチと同じ目的で、５ｍ東に設定した、幅１ｍ、延長５ｍの補助的なトレンチである。表土下1.5mで岩盤に至る。岩盤は、Ｅトレンチから東へ急角度で傾斜していることがわかった。岩盤の上には黒色土が堆積するが、やはり遺物の出土はない。

Ⅳ．遺　　物

遺物の出土は、整理箱20箱ほどであった。弥生時代から室町時代までのものがあるが、その中心は、弥生時代と中世である。

1．弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は、すべて土器である。しかしその大半が、表土や包含層からのもので、遺物の残存度も悪く、図示できたものは（26）のみである。多数出土した高杯脚片は、山中期から欠山期に相当するものである。

2．古墳時代の遺物

図示できるものは、ＳＨ21とＳＫ12からのもののみである。須恵期は、陶邑編年Ｉ型式５段階からII型式１段階に相当する[22]ものと考えられるが、焼成不良で、灰白色を呈するものが多い。

Ａ．ＳＨ21出土の遺物

（１）は土師器の壺、（２）は須恵器の甕である。（２）は、体部内面を丁寧にロクロナデするが、焼成不良である。

Ｂ．ＳＫ12出土の遺物

（３～７）は須恵器である。（３）は蓋で、天井部と口縁部の境に弱い稜をもつ。（４）は杯で、体部外面にはロクロケズリの後ナデを施している。（５）は、無蓋高杯である。全体に鋭さを欠く仕上げで、波状文は１単位５本である。環状の把手が付くかもしれない。以上（３～５）の天井部内面または底部内面には、いずれも仕上げナデが施される。（６・７）は壺である。両者とも体部下半を弱くロクロケズリするが、（７）の体部内面には、当て道具痕が観察できる。

3．中世の遺物

ＳＫ８から比較的良好な一括出土があった。

Ａ．ＳＫ12出土の遺物

ＳＫ12に混入したものである。（８）は白磁椀、（９）は山茶椀である。（９）の底部内面には、強い一方向ナデが施される。

Ｂ．ＳＺ５出土の遺物

（10～12）は、土師器の皿である。ほぼ等しい法量であるが、（10）は若干小形である。（12）は、他のものより薄手に仕上げている。

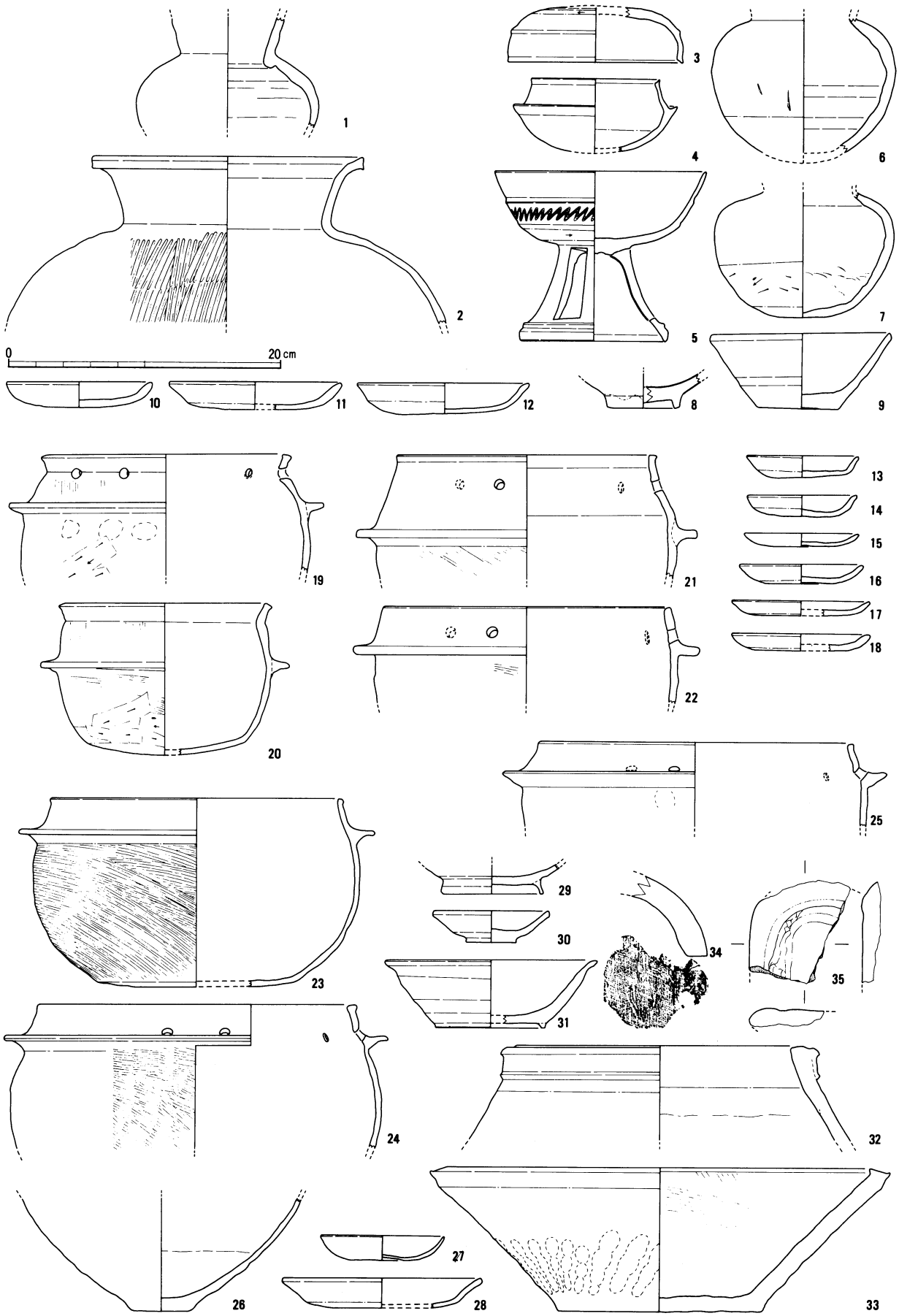
Ｃ．ＳＫ８出土の遺物

（13～18）は、土師器の皿である。小形でやや深いもの（13・14）、小形で浅いもの（15・16）、口径がやや大きく浅いもの（17・18）がある。（13・17・18）は、底部外面にも簡単なナデを施す。

（19～22）は土師器の羽釜である。口縁部が外へ屈曲するもの（19・20）、真っ直ぐ立ち上がるもの（22）、鍔以上がやや内傾し高く伸びるもの（21）がある。頸部の穿孔は、２個対に開けられるものと推定でき、いずれも外から内へ焼成前に穿孔されている。（20）についても図示していないが、他のものと同様の可能性がある。（19）の体部にはハケ目を施さず、簡単なナデで調整するため、指頭圧痕が明瞭に残る。（22）以外は鍔以下に煤が付着し、使用された痕跡をとどめている。

Ｄ．ＳＫ15出土の遺物

（23・24）は、土師器の羽釜である。（23）の体部外面は底部近くまでハケ目を施し、ヘラケズリを



第17図　遺物実測図（１：４）

行っていない。（24）の頸部には2個1対に穿孔され、（23）も同様の可能性がある。両者とも鍔以下に煤が付着し、使用時の痕跡をとどめている。

E．ＳＤ１出土の遺物

（25）は土師器の羽釜である。体部外面にはハケ目を施さず、指押さえと簡単なナデで仕上げる。頸部は、やはり2個1対に穿孔されるものと推定される。

4．包含層、その他出土の遺物

（26）は、弥生土器壺の底部である。

（29）は灰釉陶器の椀である。幅の狭い比較的高い高台を貼り付ける。底部外面もナデにより調整する。

（30）は山皿、（31）は山茶椀である。（30）の底部は、高台を意識してか、やや下方で粘土塊から切り放される。（31）は、角形の比較的しっかりした高台を貼り付け、底部外面もナデにより調整している。

（32）は陶器の甕、（33）は鉢で、いずれも常滑焼きと考えられる。（32）の縁帯は、口縁部に密着し、口唇部は平坦である。（33）は、片口が付くかもしれない。内面はナデで調整されるが、ハケ目が若干残る。

（34）は須恵質の丸瓦、（35）は硯で、石材は粘板岩と思われる。（34）の凹面は布目痕、凸面はナデで、焼成不良である。

Ⅴ．結　　語

1．塚状遺構

磐城山１・２号墳は、３号墳とともに磐城山古墳群として登録されてきた。これらについては、現在まで「信長との戦争での戦死者を埋めた。」、「女がのるとたたりがある。」と言い伝えられている。[23]

調査の結果、１・２号墳とも古墳でないことが確認され、３号墳についても同様である可能性が高まった。１号墳の墳丘下から検出されたＳＫ6からは、中世の遺物が検出され、墳丘はそれ以後の築造ということになる。また、墳丘からも山茶椀、土師器羽釜、陶器等が出土しており、それを裏付けている。２号墳の墳丘からも同様な遺物が出土していることから、それぞれをＳＺ30、ＳＺ31とした。

築造時期について、詳細は不明である。磐城山遺跡の中世出土遺物の中心は、土師器皿と羽釜である。しかし、北勢地域の土師器については不明な点が多く、その時期決定は、山茶椀に頼らざるを得ない。ＳＺ30墳丘内から出土した山茶椀は、瀬戸の編年[24]Ⅳ段階９型式前後に相当し、ＳＺ31のものは、Ⅲ段階７型式前後である。このことから築造時期は、13世紀末～14世紀初頭以降であるものと考えられるが、ＳＫ６からは、中世土師器に混じって近世陶器片も認められることから、近世に下る可能性もある。

これらは、その形態から「塚」と考えるのが妥当であろう。ＳＺ30・31ともに削平が激しく、円墳状を呈するものと仮定して、前者で1/4、後者で1/2の残存しかない。従って、埋納施設等が検出できなかったことが、則ち「塚」であることの否定につながらないことは、いうまでもない。しかし、両者とも墳頂部がかなり残存することから、埋納施設、埋納遺物は、元来なかったものと考えられ、埋葬目的の塚ではないものと考えられる。

次に、地主の話によると、ＳＺ30とＳＺ31の間にも塚があり、それを削平して畑にしたと言うことである。このことを信じれば、磐城山3号墳を含めて4基の塚が群集することになる。他に削平されたものもあるとすれば、十三塚の可能性も考えねばならない。その立地は、段丘の縁にあたり、条件の一つ[25]を満たしている。しかしその規模は、ＳＺ30が、基底径20ｍを測る大型のもの、ＳＺ31が16ｍ、3号墳が6ｍと様々である。しかも、多くの十三塚が直線状に配置する[26]のとは異なるものである。

木田地区の縁辺部であることから、「塞ノ神」の信仰による可能性もあり、その方向は「鬼門」に相当する。また、「シャゴジ」の様に開墾に関連するもの[27]であれば、この台地上の開墾時に造営されたものとの推測も成り立つ。

中世から近世にかけて全国的に散在している塚は、

その造営目的に多用の意識が反映されている。しかし発掘調査の結果、必ずしもそれが明らかにされるにいたらない例が多い[28]。ＳＺ30・31についても、その造営目的は推測の域を出ず、不明とせざるを得ない。しかし、少なくとも埋納、埋葬を目的としたものではないようである。

２．城館状遺構

ＳＤ１は、その平面上の形態は、台地を切断し、中央部に土橋をもつ城館の堀として疑いないものである。小字名も「磐城山」で、隣の木田城に由来する可能性もあるものの、一応「城」のつく地名である。しかし、ＳＤ１の内部をみた場合、既述したように多くの疑問が生ずる。このため、掘削途中で放棄されたものと推測したい。底が非常に凸凹で、それは、まさに掘削途中の状況である。また、通路状の掘り残しも土砂運搬のためのものであろう。さらに、Ｄトレンチから、遺構や遺物とも全く検出されなかったことも、完成された城館と認められない一因である。また、ＳＺ30墳丘は、粘質土が主体であり、赤茶色礫層を掘り抜くＳＤ１掘削時に盛り上げられたものではない。したがってこれは、土塁の残存ではなく前述のように塚と考えている。

この台地を形成する赤茶色礫層は、非常に硬い岩盤で、戦時中は軍隊が防空壕として利用したほどである。人力掘削の当時としては、非常な苦労と時間を費やしたに違いない。このことが、掘削を放棄する原因か、城館を必要とする時期に間に合わなかった結果であるものと推測する。最後に、Ａ地区付近は、地元では「ジョロウグチ」と呼んでいることを付け加えておく。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報１』1990.3
三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報２』1991.3
三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報３』1992.3
三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報４』1993.3
② 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報19』1989.3
③ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報２』1991.3
④ 中森成行『富士山10号墳調査概要』鈴鹿市教育委員会　1978.6
⑤ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報４』1993.3
⑥ 前掲③に同じ
⑦ 新田　剛『南山遺跡・南山6号墳』鈴鹿市教育委員会　鈴鹿市遺跡調査会　1991
⑧ 新田　剛『蛸田古墳』鈴鹿市教育委員会　鈴鹿市遺跡調査会　1991
⑨ 大場範久「北野古墳」『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』鈴鹿市教育委員会　鈴鹿市遺跡調査会　1978
⑩ 前掲③に同じ
⑪ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報１』1990.3
⑫ 『日本古典文学大系68 日本書紀 下』岩波書店　昭和40年
⑬ 浅尾　悟『伊勢国分寺跡（５次）長者屋敷遺跡（１次）』鈴鹿市教育委員会　1993.3
⑭ 前掲⑬に同じ
⑮ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報11』1981.3
⑯ 前掲⑬に同じ
⑰ 三重県教育委員会『三重県文化財年報９』1979.3
三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報２』1991.3
⑱ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報８』1978.3
⑲ 仲見秀雄「鈴鹿市」『日本歴史地名大系24　三重県の地名』平凡社　1983
⑳ 仲見秀雄「木田城」『三重の中世城館』三重県教育委員会　昭和52年
㉑ トレンチ調査時点で、ＳＤ１、ＳＤ７としたが、その後の面的調査で同一遺構であることが判明したため、今後はＳＤ１とする。
㉒ 中村　浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981
㉓ 地元古老、地主からの聞き取りによる。
㉔ 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ｉ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ｉ』瀬戸市歴史民俗資料館　1982
㉕ 木下　忠「十三塚研究の視角」『考古学ジャーナルNo274』ニューサイエンス社　1987
㉖ 前掲㉕に同じ
㉗ 久志本鉄也「シャゴジ小考」『三重県民俗研究論集』三重民俗研究会　1992
㉘ 坂詰秀一「「塚」の考古学的調査・研究」『考古学ジャーナルNo274』ニューサイエンス社　1987

出土遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	009-02	土師器・壺	L-4 SH21	—	—	—	内外面ナデ、内面粘土紐接合痕が明瞭に残る	6㎜の砂粒含	良	橙色	頸部～肩部完存	
2	009-03	須恵器・甕	〃	19.8	—	—	体部外面タタキ、内面ロクロナデ。	〃	不良	灰白色	1/10	
3	004-01	須恵器・蓋	B-6 SK12	12.8	4	—	天井部外面1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	1㎜以下の微砂含	良	灰～灰白色	1/8	ロクロ左回転
4	004-03	須恵器・杯	〃	9.4	5.4	受部径 12.0	底部外面ロクロケズリ後ナデ、他はロクロナデ	1㎜以下の微砂若干含	良	灰～灰白色	受部 1/5	
5	006-01	須恵器・高杯	C-7 SK12	15.5	12.3	脚径 10.5	杯底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	1㎜以下の微砂若干含	やや不良	灰白色	1/4	ロクロ左回転
6	005-02	須恵器・壺	B-6 SK12	—	—	—	体部外面下半弱いヘラケズリ、他はロクロナデ	精良	不良	灰白色	1/3	
7	004-04	〃	〃	—	—	—	〃	2㎜以下の砂粒含	やや不良	灰白色	体部完存	
8	004-02	白磁・椀	〃	—	—	高台径 5.3	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	良好	灰白色	1/4	内外面施釉
9	002-04	陶器・椀	B-7 SK12	13	5.4	底径 5.8	底部外面糸切り未調整、他はロクロナデ	2㎜の砂粒多含	〃	茶灰色	完形	山茶椀
10	003-02	土師器・皿	F-5 SZ5	10.8	1.8	—		微砂多含	〃	浅黄橙色	1/4	摩滅が激しく調整不明
11	003-01	〃	〃	12.4	2.0	—	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整	〃	〃	〃	〃	摩滅が激しく調整不明確
12	002-05	〃	〃	12.5	2.2	—	口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整	1㎜の砂粒含	〃	淡黄色	完形	〃
13	002-06	〃	F-5 SK8	8.1	1.6	—	口縁部ヨコナデ、内外面ナデか	3㎜の砂粒多含	〃	橙色	ほぼ完形	〃
14	003-07	〃	〃	8.0	1.6	—	口縁部ヨコナデ、底部内面仕上げナデ、外面未調整	〃	〃	淡橙色	3/4	
15	009-01	〃	〃	8.4	0.9～1.0	—	内面ナデ、外面未調整	4㎜の砂粒含	良	鈍橙色	2/3	
16	003-06	〃	〃	9.0	1.3	—	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整	2～3㎜の砂粒多含	〃	淡橙色	1/3	
17	003-04	〃	〃	10.0	1.1	—	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ	3㎜の砂粒含	〃	〃	1/4	

出土遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
18	003-03	土師器・皿	F-5 SK8	10.0	1.2	—	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ	3㎜の砂粒含	良	淡橙色	1/4	
19	001-02	土師器・羽釜	〃	17.0	—	—	体部外面下半ヘラケズリ、他はナデ	微砂多含	〃	黄白色	1/8	鍔以下煤付着、頸部に穿孔あり
20	001-01	〃	F-5 SK8・No.1	15.6	10.9	—	底部外面ナデ、体部外面下半ヘラケズリ、上半ハケ目、他はナデ	3～5㎜の砂粒含	〃	〃	1/3	頸部に穿孔の可能性あり
21	007-01	土師器・羽釜	F-5 SK8	19.0	—	—	体部外面ハケ目、他はナデ	3㎜の砂粒含	やや不良	灰白色	1/8	頸部に穿孔。鍔以下煤付着
22	008-01	〃	F-5 SK8・No.2	20.7	—	—	〃	微砂粒含	不良	〃	〃	頸部に穿孔
23	010-01	〃	E-4 SK15・No.1	21.0	13.6	—	底部外面未調整、体部外面ハケ目、他はナデ	砂粒含	良	浅黄橙色	1/4	口縁部小片。鍔以下煤付着。頸部に穿孔の可能性
24	008-03	〃	E-4 SK15・No.1	23.2	28.0	—	体部外面ハケ目、他はナデ	4㎜の砂粒含	やや不良	淡黄色	〃	鍔以下煤付着
25	007-02	〃	E-3 SD1	28.2	—	—	内外面ナデ	〃	〃	浅黄橙色	1/6	鍔以下煤付着
26	010-02	弥生土器・壺	D-7 包	—	—	底径 4.5	—	砂粒を含む	良	淡橙色	底部完存	内外面摩滅が激しく調整不明
27	010-03	土師器・皿	E-4 P1	9.0	1.8	—	—	微砂粒含	〃	浅黄色	1/4	〃
28	008-01	〃	試掘坑9	14.6	2.2	—	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ	2㎜の砂粒含	不良	灰白色	〃	
29	002-03	灰釉陶器・椀	D-4 茶色土	—	—	高台径 7.2	底部外面ナデ、内面ロクロナデ	2㎜の砂粒若干含	良好	〃	2/3	
30	002-02	陶器・皿	C-4 茶色土	8.7	2.3	底径 3.6	底部外面糸切り未調整、内面仕上げナデ、他はロクロナデ	1～3㎜の砂粒多含	良好	〃	1/4	内面に自然釉がかかる。山皿
31	002-01	陶器・椀	B-5 表土	15.5	4.9	高台径 7.5	底部内外面ナデ、他はロクロナデ	1㎜の砂粒多含	〃	〃	1/4	口縁部小片 山茶椀
32	005-01	陶器・甕	C-4 表土	20.8	—	—	内外面ロクロナデ	1.5㎜以下の砂粒含	〃	灰赤色	1/6	常滑焼か。
33	003-05	陶器・鉢	試掘坑9	33.6	10.4	底径 15	口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整	3㎜の砂粒若干含	〃	淡黄橙色	1/12	常滑焼か。
34	006-02	瓦・丸瓦	F-4 表土	—	—	—	凸面工具によるナデ、端部ヘラケズリ、凹面布目痕	1.5㎜以下の微砂含	不良	〃	1/8	須恵質
35	006-03	石製品 風字硯	1号墳 表土					粘板岩		黒灰色	1/4	

図版 1

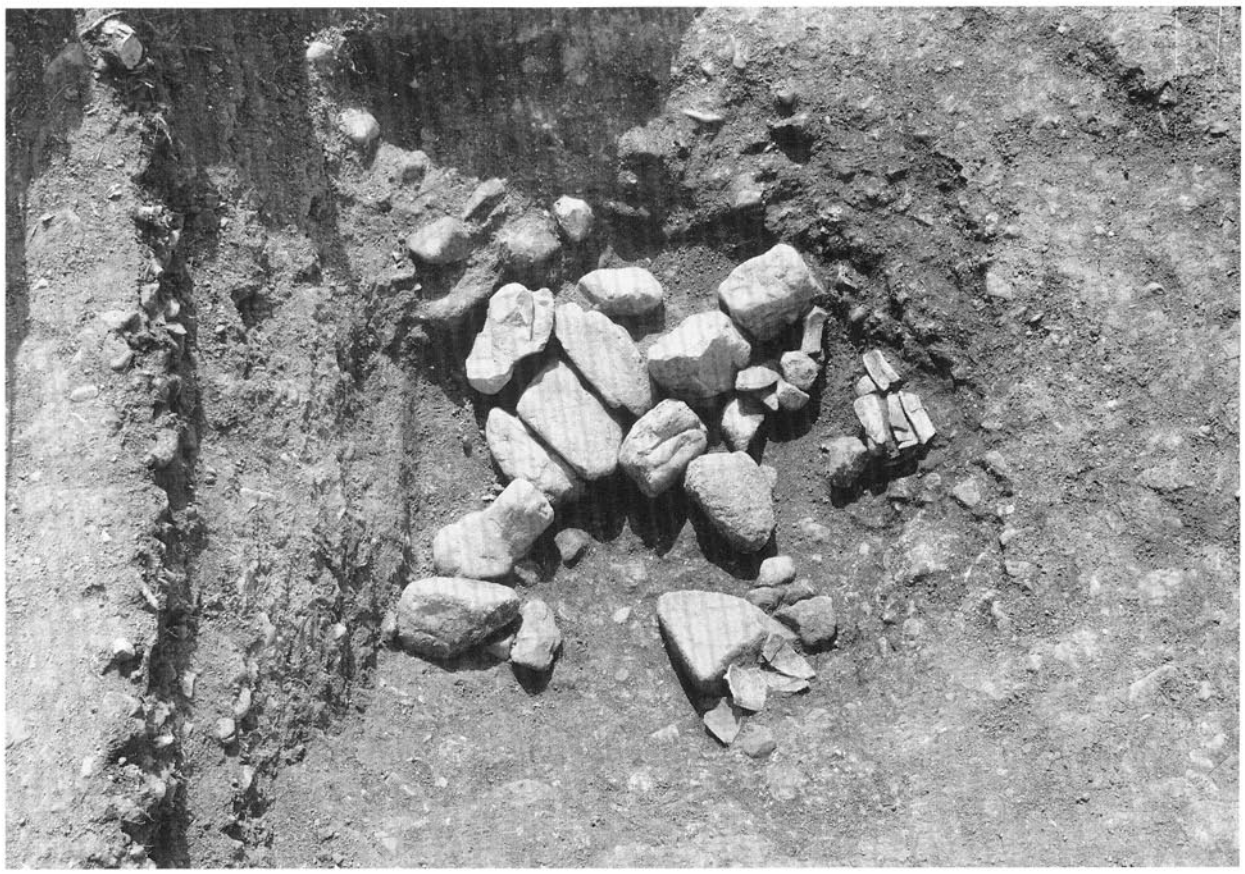
ＳＺ30（磐城山１号墳）調査前風景（南から）

ＳＺ31（磐城山２号墳）調査前風景（南から）

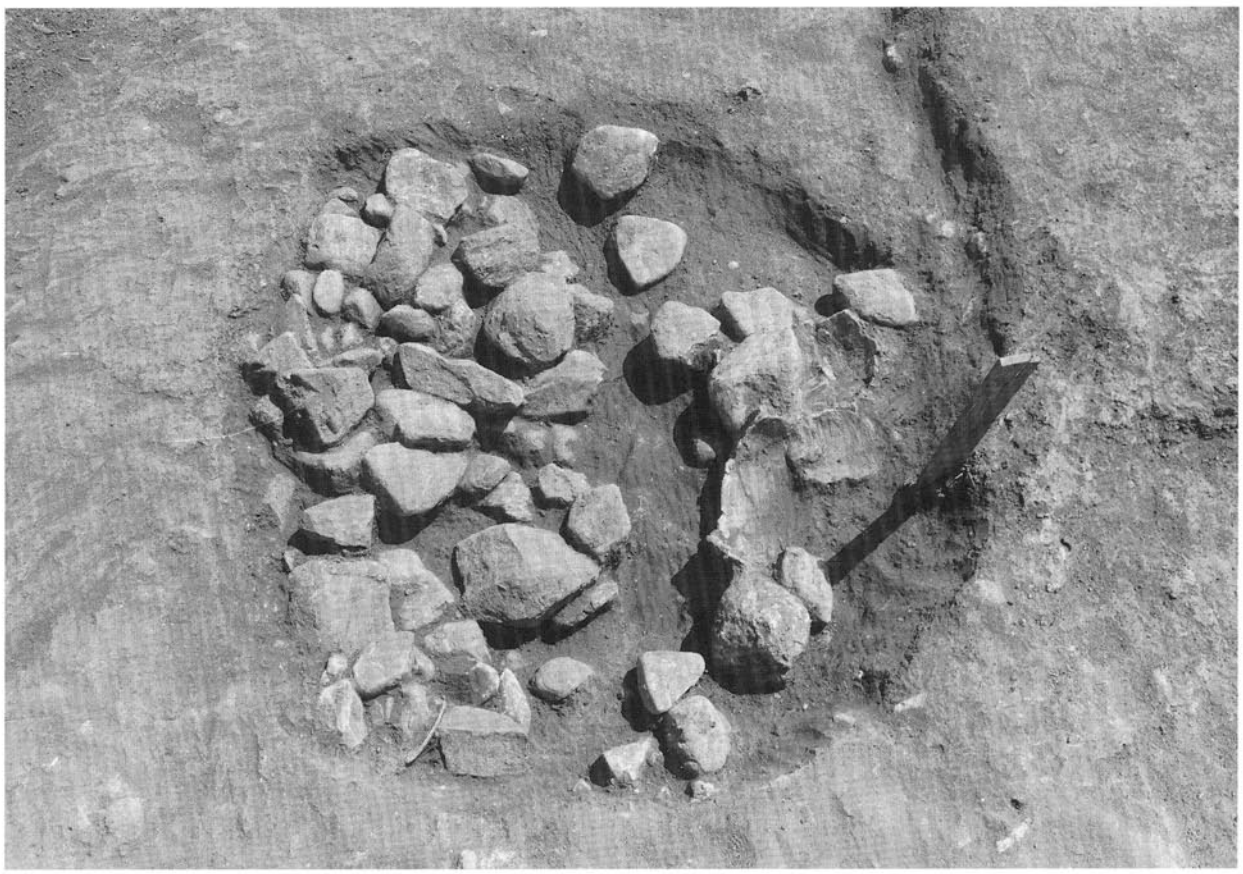
図版２

ＳＺ30（磐城山１号墳）とＡ地区全景（南から）

ＳＺ30（磐城山１号墳）とＡ地区全景（北から）

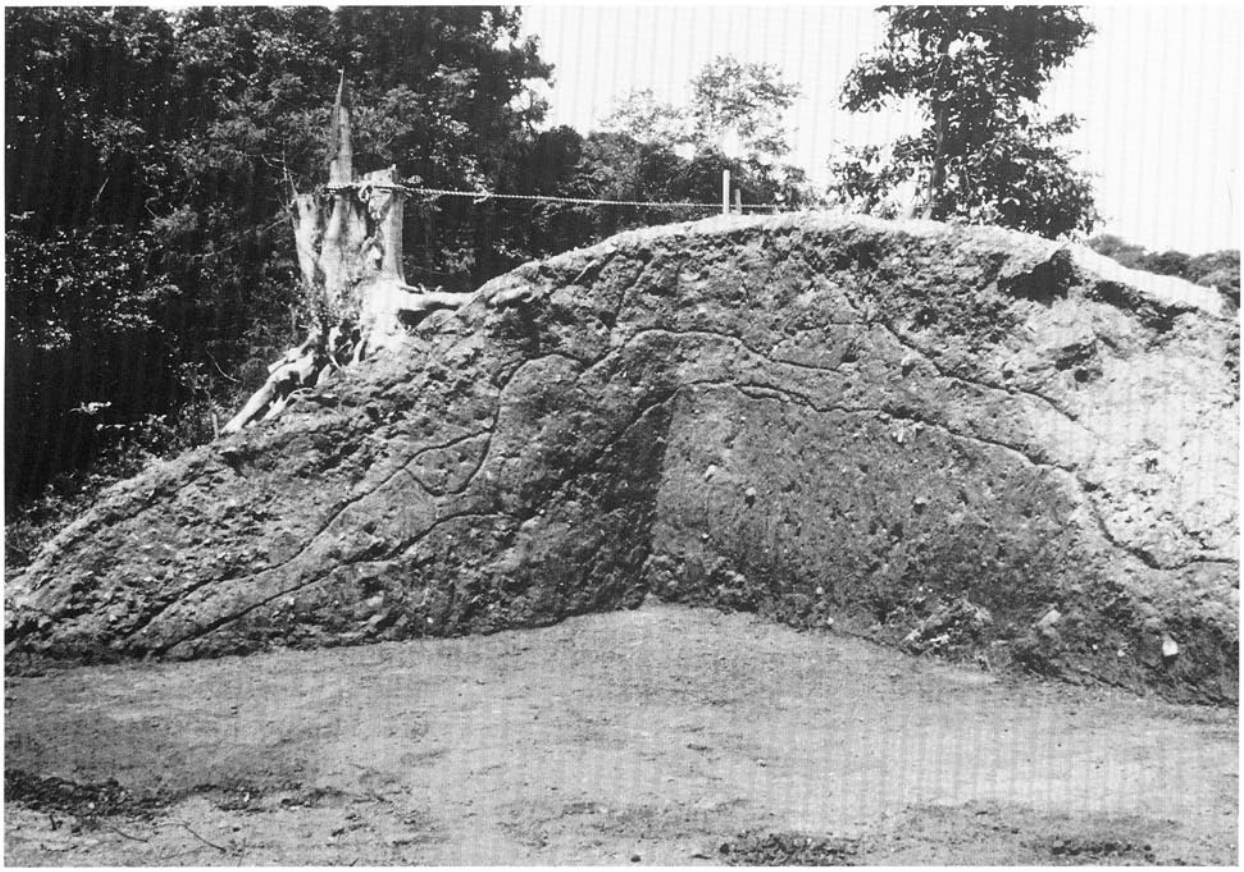


SK8　（東から）



SK15　（北から）

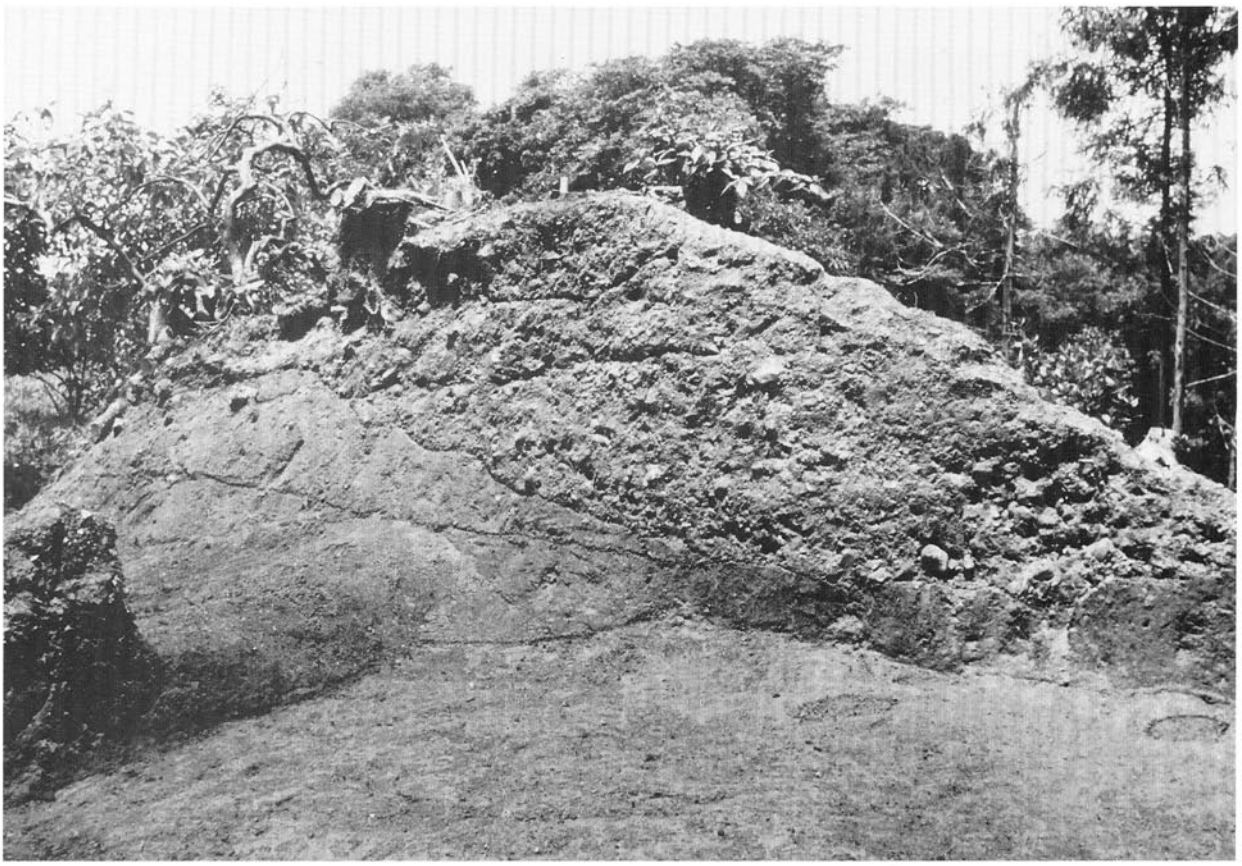
図版 4



ＳＺ30（磐城山１号墳）断面（南から）

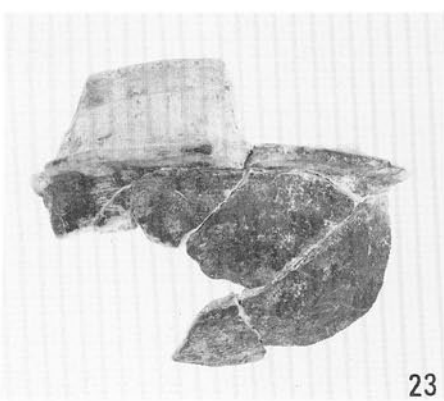
ＳＤ1　（西から）

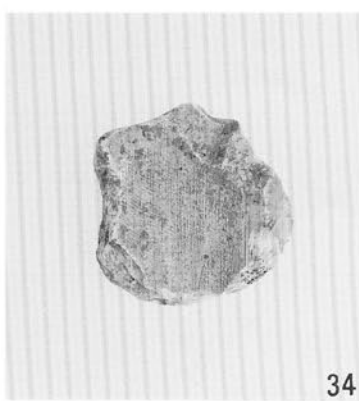
ＳＺ31（磐城山２号墳）とB地区全景（南から）

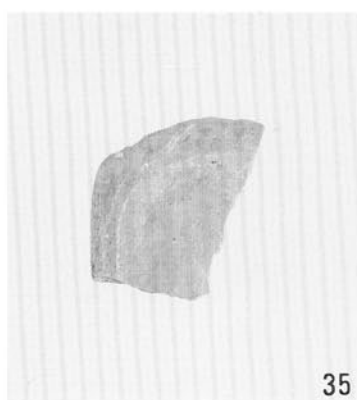


ＳＺ31（磐城山２号墳）断面（南から）

図版 6







出土遺物（1：3）

三重県埋蔵文化財調査報告 117

磐城山遺跡発掘調査報告

1994年3月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　オリエンタル印刷株式会社

平成6(1994)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。